

宗教倫理学会第23回学術大会

公開講演

2022年10月29日（土）

オンライン開催

講 師

鎌田 東二（京都大学 名誉教授）

演 題

神道における場所と「世間」

レスポンス

宮本 要太郎（関西大学 教授）

鬼頭 葉子（同志社大学 准教授）

司 会

氣多 雅子（京都大学 名誉教授）

神道における場所と「世間」

鎌田 東二（京都大学名誉教授）

はじめに～現代詩の中の「世間」

今日の私の発題は、「世間」という日本的な言葉や概念は一種の「被膜」のようなものではないかという主張となります。その「被膜」は、ある場合にはポジティブにも働くけれども、ある場合には同調圧力のようなネガティブなものも生み出します。

結論を先取しておけば、「世間」とは、「胞衣（えな）」のような被膜である、というのが、神道生命論的に見た世間観だと考えます。このような感覚や思考は根が深くすでに『古事記』や『日本書紀』のいわゆる「国生み神話」に端的に現れています。イザナミノミコトは「大八島」（日本列島の呼名）と呼ばれる国土を出産します。とすれば、国土は胎児としてイザナミの胎内にあったということになります。『日本書紀』神代巻四段の本文では、「産む時に至るに及びて、先づ淡路洲を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名けて淡路洲と曰ふ。（及至産時、先以淡路洲爲胞。意所不快。故名之曰淡路洲。）」と記されています。このような胞衣的胞撰の中にあるという神話的思考が日本人の世間観の根底にあるというのが私の問題提起です。それはまた、「^{あらわ}顕と^{かくり}幽」、場の宗教としての神道と神社や記紀神話や延喜式祝詞の「^{くききよくこととふ}草木能言語」から天台本覚思想の「草木国土悉皆成仏」までの被膜連鎖を生み出し、さらには、「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」と『古今和歌集』仮名序で歌の哲学を展開した紀貫之の歌論にも接続します。それらに貫通する胞衣的世間観のありようの意味とその根深さを考察します。

そこでまずは、その「被膜」のようなものに包まれているという感覚がいったいどういう根っこをもっているのかを神道古典ともいえる『古事記』や『日本書紀』の「国生み神話」にルーツを探りながら考えていきます。その時に、言葉と場所の問題が重要な課題として登場してきます。

全体の流れは、まずはじめと終わりに一つのエピソードを語ります。現代史の中で「世間」をどう表現しているかという、最新の詩を紹介します。十数年前の朝日歌壇に掲載されたホームレス歌人の短歌をご紹介します。二つのトピックス、エピソードのような

ものです。

まず第一章では、古典から考えてみる「神道」とは一体何なのかを考察します。第二章では、神道において場所や自然とやいのちがどういう被膜的なものを造り上げているのかを考えてみます。そしてその具体的な現れとしての「うた」、短歌や近世以降の俳句や平安時代以降の仏教の「天台本学思想」たとえば「草木国土悉皆成仏」の思想とそれらがどのような絡まりをもつのかについて考えを述べていきたいと思います。

最初のエピソードは、10日前に読んだ新聞記事の詩です。これを読んでハッと思いました。

希望がそこにあった
私は幸福を求めている
この場所が世間であった

氷が溶け始めてからそれほど時間は経っていない。景色がゆっくりと色づいている。私のすぐ隣には溶けた人が転がっている。一瞬辺りが白く光り、すぐに真っ黒へと変わった。すると溶けだした。溶けだしたものは、音を吸い込み浸食した。私は痛みを感じた。ここは美しいところであった。遠くに山が見える。今、山は赤く染まり、この場所をかこっている。上空を薄く包んでいた膜が、少しずつ破れている。ゆっくりと裂け目が広がっていき、赤黒い液体になって流れる。山が溶け、川を伝って流れていく。家が溶け、人が溶け、木々も溶けてしまった。この場所が平坦になることにそれほど時間はかからなかった。安全はどこにあるか。私は平穏を探している。囲われたこの場所が、私の世間であった。

これを書いた牛山茉優さんは1995年生まれで、早稲田大学文化構想学部を昨年卒業しました。そして、卒業と同時に、「インカレポエトリ叢書」の1冊として、第1詩集『洞』（七月堂）を出版しました。この『洞』の中には、「水と膜」というタイトルの詩が掲載されています。

私が宗教倫理学会での講演要旨を書き送った後にこの詩に出会ってちょっと驚いたんですね。私を感じてきた古代的な被膜的なイメージと現代の被膜的イメージがつながっているという、今と昔、『今昔物語』みたいにすごくよく表現できていると思いましたので、これをとっかかりにして、考えてみます。

牛山さんが持つ「希望、幸福、美しいところ、安全、平穏」という、ある種の幸福感

のようなものは、膜の中にある。これは好ましい「世間」のイメージです。ところが、時間の推移の中で、空間的な景色の変転が起こる。それが最近、今、ということになります。希望や幸福を求めても、それが得られるとは限らないし、多くは裏切られる。費え去っていく。それが「溶ける」という形で表現されている。溶けた人が転がっている。その人が白くなって、真っ黒に変わっていく。そこで痛みが生まれる。山が見えるけれども、山も溶けていく。山は今、赤く染まって、この我々のいる場所を囲っている。しかし包んでいた膜は少しずつ破けて裂け目が広がっていき、赤黒い液体になっていって、山も家も人も木々も溶けてしまって、やがては何もなくなってしまう。もう平坦になってしまう。そういう状況というのは、コロナ禍を経た我々の時代状況や同調圧力のようなものに苦しんできた我々の現実の姿を表現しているとも思えます。

この詩のメッセージは、アンビバレントです。希望と幸福を求める被膜的で安全で平和な場所を求めている。それは美しく、心地よい。昔から、「まほろば」といわれていたような空間ですが、それはしかし、壊れてきている。溶けてきている。けれども、私はそうした安穏や平安や安全を求めている。その「世間」は、囲まれた場所としての私にとっての心地よい場所です。

この詩の中で、「世間」は決してネガティブな意味性を有してはいません。むしろ「世間」は自分の被膜である。それはポジティブで、価値性を伴う言葉。それを、当年27歳の女性の詩人が語っているわけですね。これは、朝日新聞に10日前に掲載されていたものですので、最近書かれたものだと思います。今、この時期に、そういう思いをもたれているはず。あたたかな美しい場所性、景色というのは、どんどん溶けだして浸食されている。その「世間」は失われている。そこに痛みがある。こういう現実が我々の目の前に突きつけられていて、今、起こっている旧統一教会問題もそうですけど、簡単に解きほぐし難いような難問が、いくつもあるわけですね。

1. 『古事記』および古典から考える神道的「世間」の思想と構造

そういうことを考えていく際の手がかりの一つとして、「膜」がどういうふうにとらえられてきたのかを探ってみます。今、起こっている現実の問題についても深いところから考えてみようという意図をもって、『古事記』『日本書紀』『延喜式祝詞』『古今和歌集』などを採り上げ、そうした古典研究をしてきた平田篤胤の『古道大元顕幽分属図』も参考にしながら、神道の立場から「世間」がどうとらえられてきたのかを見ていきます。

『古事記』の神話物語は、起承転結で成り立っているととらえられることが可能です。

①国生み神話＝起、②国作り神話＝承、③国譲り神話＝転、④国治め神話＝結、の四段階です。そしてそれが、現代の第126代天皇が「三種の神器」をもって天皇となり日本国の「象徴」となるという日本と天皇の歴史にもなっている。しかもそれは日本的被膜の形成と大きな関係にあり、この元になる物語を『古事記』は語っているわけですね。そこにおいて、「祭」と「うた」が出てきますが、これは「国生み神話」という最初の起承転結の「起」の部分での生存戦略として表出されます。日本の「祭」の起源が「天岩戸神話」という物語によって説かれるわけです。

ところが、そのつくった国を譲る、これもなかなか大変なことで、今のウクライナ戦争のことを考えると国を譲るなんて果たしてできるのか。国を治めるのはとても難儀なことだと思われまます。

その「国譲り」が起こってくるブリッジ・媒介を成すキーマンの神が須佐之男命です。須佐之男命は天照大神の弟ですが、『日本書紀』本文では大国主命の実の父親、『古事記』では第六代前の先祖ということになっています。この須佐之男命が高天原で引き起こした乱暴狼藉に天照大神が怒り悲しみ、天岩戸に隠れてしまったために世界が真っ暗になり、大自然災害の状態が起こるわけですね。隕石が落ちて真っ暗になったみたいな。そうした生存危機を打開するために何をしようかと神々が相談して、その挙句に「祭」を行おうということになりました。そこで、天岩戸の前で祝詞を奏上し、手に笹をもって神楽の起源になる舞を舞った。これが天児屋命とか天宇受売命たちのやった最大の生存危機を打開する生存戦略でした。

こうして、生存危機の原因をつくった須佐之男命は高天原を追放されて出雲に降り立ち、そこに襲いかかってくる怪物の八岐大蛇を退治します。そして、八岐大蛇を退治した時に初めて、自分の心が晴々として「うた」を歌ったのです。この「うた」を歌うことの意味と価値は一体何であったか。これが、神道から見た世間と場所と被膜とどうかかわるかをこれからじっくりと見ていきます。

日本神話においては、まず冒頭の「国生み神話」の中で、最初の被膜思想が語られています。『古事記』においてイザナギ・イザナミという神々が高天ヶ原から命を受けてミッションが下ってきて、命をオノゴロ島というところで、みとのまぐわい、性行為を行い、性行為を行った後に出産するように島々を生んでいく。この八つの島々、これを「大八嶋の国」と名付けて、続けて「吉備の児島」以下の島々を六島、生んでいく。合計十四の島々を生み、この島々の総称が「大八嶋の国」となるわけですね。それをわかりやすく口語的に『超訳 古事記』を2009年に書いたので、そこから流れを見ていきます。

「海の中から生まれた一つの島の上で神々が一つになった。一つに溶け合って、その一つの命が無数の命に分かれ出て島となった。ウームオム、ウームオム。イザナミの命は次々と子どもたちを、命の島々を生んでいく。海の中から生まれた一つの島の上で神々、水蛭子、淡路島、最初に生まれた水蛭子は、まだはっきりした形をなさないために海の彼方に流しあつた。阿波島もまた形をなすことがなかつたために泥の海に放ち、戻した。形を成した島こそ淡路の狭別の島である。水蛭子より阿波島よりも大きく形を成し、力強い姿形の島となった。次に伊予の二名島、今の四国は阿波と讃岐の四国の国々である。この二名島は身一つにして顔四つ。

東南の顔は阿波の大宣都比賣。西南の顔は土左の建依別。西北の顔は伊予の愛比賣。東北の顔は讃岐の飯依比古。その四つの顔は阿波の女神、土佐の女神、伊予の女神、讃岐の男神となった、おのずとそれぞれの男女の組み成す四つの国となる。

次に隠岐の三つ子の島が生まれた。その名を隠岐之三子島という。次に筑紫ノ島が生まれた。この島もまた身一つにして顔四つ、北の筑紫の国は白日別。東の豊の国は豊日別。西の火の国は建日向日豊久士比泥別。南の熊曾の国は建日別という。これらの神々は、みな雄々しく火を吹く男神たちであつた。続いて天比登都柱の伊伎島。天之狭手依比売という名の津島、そして佐度島が生まれた。

次に天御虚空豊秋津根別という名の大倭豊秋津島が生まれた。今の本州が生まれた。これは最初に生まれた八つの島々を合わせて「大八嶋の国」と名付けた。大八嶋の周りに、さらにたくさんの小さな島々を生み出した。そして続いてまた石の神、風の神、海の神、木の神、山の神など、ありとあらゆる山川草木、海山風土のあらゆる天地の間にある神々を生み出した。そして最後に火の迦具土神、火の神を生み出した。

伊邪那美神は最初に水蛭子を生み、最後に火の神、枳具土を生み、鉾物や土や水の神々を、この世にもたらして黄泉の国に去って行った。黄泉の国、夜のような暗黒の国。その暗闇の中にひとり、伊邪那美神は去って行った。

愛しい、愛しい我が妻よ、なぜにお前は私ひとりをおいて先立って行ったのか。私のもとに戻ってきてほしい。悲しみと悔いにさいなまれた心が怒りと変じた。イザナギの神は悲しみと怒りにかられ、生まれ出た神枳具土を切り刻んだ。神枳具土から真っ赤な血潮が生まれ出て巖に飛び散った。そしてそこから鹿島春日の神となる。建御雷之男神、香取神となる、布都神など、猛々しい、荒々しい力ある神々と、さまざまな形の巖が生まれ出た。

この岩作の神から闇霧神までの「発心」、正鹿山津見神から山津見までの「発心」などが、首を切った時の力、頭を切った時の力、現れ出た。

この『古事記』冒頭の「国生み」「神生み」神話というのは、まるで地球史的な生成過程を見ているかのようす。この日本列島のことを、『古事記』では「クラゲ成す漂える国」といっているのですが、まさにそれはプレート運動そのものだと思います。葦原の中国、葦が生えている国、クラゲのような国、これはわりと現実的にとらえて、それも大八嶋というのも島々の国、これらは稲穂が実る、豊葦原の瑞穂の国へ転換していく、修理固成していく、これを『古事記』は語るわけですね。

日本にはご存じのように1 1 1の火山があり、延喜式内社も、それにあわせて3 1 3 2座あるんですが、伊豆半島に9 2、三陸に1 0 0あるというのは間違いなく災害が多い、地震が多い、南海トラフのような三陸沖の日本海溝とかがある。壱岐対馬に多いのは国防の拠点であり、海洋貿易の中継地である。このような形で「延喜式内社」も多くなって京や奈良や、地方が生まれてきている。まさに日本列島はプレートの十字路なんですね。ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピンプレート、この4つのプレートに折り重なっている、つなぎあっている、そこに「クラゲ成す国」の「産霊」（むすひ）の神聖エネルギーが飛ぶのが『古事記』の神学です。その「産霊」の力をメンテナンスできるように修理固成しなさいというのがイナザギ・イザナミのミッションとして与えられて、その修理固成の一つに神々や国々、島々を生んでいく、その最後に天照大神、月読命、須佐之男命を生んだという話の流れになるんですね。けれども、そこにはさまざまな荒ぶる負のエネルギー、荒ぶる神、ちはやふる神があり、その日本列島の災害をシンボル化するような荒ぶる神々の力を、どういうふうに鎮め、つきあっていくのか、これが一つの大きな課題になっております。

そのような荒ぶる神、荒ぶる様というのを「荒御魂」、恵みをもたらす「和魂」、幸いをもたらす「幸魂」、不思議な働きをする「奇魂」、こういうような考え方も生まれてきます。これも「神道の靈魂観」として重要な考え方ですね。

2. 四国遍路

実はこの「国生み神話」というのは四国遍路が、後の近世、江戸時代に生まれてきて日本の接待文化の一つのホスピタリティ、ホスピタル・ケア的な一つの地域文化になると思うんですが、それにも影響を与えているというのが私のとらえ方です。伊予、讃岐、阿波、土佐というのは東側二国、讃岐、阿波は食べ物に関する男女神のペアですね。西側二国は伊予と土佐、伊予は愛比売、土佐は建依別、猛々しい男の神、美しい女の神が、うまく四国四県は陰陽の絶妙のバランスの中で、そこにおいて歩いているうちに、千何

百キロくらいあるのでしょうか、「死と再生という心身変容」が起こるといことが、このお遍路さんの中であって、地域にいる方たちが、さまざまな形でお接待をする、こういうところを「カッタイさん」と呼ばれた病者も行く、帰る家のない人たちもここに行くということも含まれていたと民族学的にはいわれております。現実はずっとずっと厳しい差別もあったと思われませんが、しかしそういう文化形成や表現は今日まで残されているわけですね。

阿波が「発心」と、だんだんと仏教的な意味づけがなされてきて、土佐が「修行の道場」、伊予が「菩提の道場」、讃岐が弘法大師、空海が生まれたところなので「涅槃の道場」と「発心・修行・菩提・涅槃」という意味論が加わっていきます。「発心」して阿波の「国生み」を回って室戸岬から足摺まで約300キロをひたすら歩く。外側の大きな太平洋を臨みながら。台風メッカですから台風も襲ってくる。しかしそういう雄大な光景の中で自分の心も体もじつにちっぽけなものであって、その中でこのように苦しんでいるということがいろんな形でわかってくる。そこで触れ合う遍路役の人々であるとか、地域の人々との交流の中で身心が溶けだしていく。先程ほどの牛山菜優さんの「溶ける」ではないですが、ほぐれていく。そういう自分をじっくり洗い直すような時間と期間をもつ。そういう経験をしていく。これが自然の景観の移り変わりとともに変化する。なぜならば、外海である太平洋に面している土佐に対して、内海の瀬戸内海の方になるとまことに穏やかなんですね。足摺岬から愛媛に行くと、「なんと美しい、なんてまろろかなのか」という感じが実際によくわかります。私も大学三年の終わりにお遍路さんをして、この大きな景観の違いがとても大きな自然のケアになっていると感じ入りました。

そういう中に、「同行二人」というお大師さん信仰が息づいているのです。そのような信仰や信念をもつことで、この世界を生きる力、「同行二人」の力と接待の地域の文化と自然の景観の移りゆきの中で、この世智辛い「世間」の中にうごめきもがくさまざまな苦しみをほぐしていく経験をたどり、それを仏教的に意味づける。その仏教的な意味づけの根幹に四国の「国生み神話」のような神話的思考が元にあったと言いたいわけですね。

古代から四つの顔をもつ、陰影をもつ四国の自然風土の中を、弘法大師との「同行二人」で歩行をしながら「心身変容」を遂げていく技をもつ霊場巡礼文化が四国遍路である。何よりも大事なものは、この四国遍路の「歩行」において苦しきも痛みもあるんですが、一つは悠久の海、二つの海、すなわち太平洋と瀬戸内海の風光によってほぐされていく。さらに、四国のど真ん中の四国山脈の中を通過することによってほぐれていく。

そしてその里に住む人々、山に住む人々、海に住む人々の「世間」の中からケアされていくことを通して変容を遂げていく、このような「国生み神話」的な物語をベースにしたお遍路さんの仏教的意味づけができており、これは日本の「世間」文化のポジティブな一面であると、四国出身の私などは言いたくなります。

3. うたの被膜性と世間性

もうひとつ、日本神話における「まつり」の発生と「うた」の発生についてです。『古事記』では、天照大神が天の岩戸に隠れた時にさまざまな禍が起こり、パニック状態になった。それを打開するために「まつり」を行ないます。天鈿女命が手に笹をもって踊りを踊っているうちに神がかりし、それを見て神々が一斉に花が咲いたように大笑いをした。その時、『古語拾遺』という平安初期の807年に記された斎部広成の著作では、「あはれ、あなおもしろ、あな楽し、あなさやけ、おけ！」と神々が口々に喜び叫んだと記されています。天が晴れて光が差してきて（天晴れ）聖なる光を受けて顔が白くなる（面白）。すると、自然に手が伸びて阿波踊りやカチャーシーのように踊り出した（楽し）。「さやけ、おけ」は自然に笹や木の葉がさやさやそよそよとスイングするということ。それが神楽の元になっているということが、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』などで語られるんですね。

もう一つ、「うた」の発生。須佐之男命は自分たちのさまざまな天の罪国、罪を背負って放浪した。日本で最初の放浪神、追放された神が須佐之男命です。ところが追放された先に襲来して来る八岐大蛇という八頭八尾のモンスターを退治して初めて自分の心が清々しく晴れ晴れとした気持ちになる。

先の高天原では「まつり」によって世界全体にハレ（晴）が起こるのですが、須佐之男命は八岐大蛇を退治して「うた」を歌うことによってケガレを脱して心が晴れるわけです。「あなんて我が心は清々しいのだ、こんな清々しく気持ち心持ちは初めてだ」といって我が国で最初の「うた」を歌った。それが、「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」の歌です。「たくさんの雲がたち上ってくるこの出雲の地で私は大変美しい櫛名田比売という姫を得た。その喜びの中で八重垣をもって姫を大切に籠もらせる愛の住まいを打ち立てて、常永久にここで愛するおまえとともに過ごしていこう」という愛の讃歌を歌うわけですね。これが日本の最初の歌だとされる。須佐之男命はその思いを歌にし、心の高まりを鎮めた。これをもって我が国は歌ぶりの栄える詩の国、歌の国となったというわけです。

ここにおいて、「まつり」は被膜の強化であり、「うた」は被膜のメンテナンス、修理固成である。それが私のとらえ方です。

「幼き頃より母をしのび、母を恋した海山を枯れ干すまでに泣き叫び、高天原での乱暴狼藉の限りをしたさまざまなる禍をもたらした悪逆非道の神が、恐ろしい怪物を退治して新しい世界を切り拓き、愛の言霊を奏でて世界に麗しい調べをもたらし、神々と人々を幸せにする技を伝えた。

こういう須佐之男命の「うた」の力というものが『古今和歌集』『新古今和歌集』の中で、スサノヲ・ルネサンスとして顕れる。紀淑望の記した『古今和歌集』真名序には「素戔嗚尊の出雲の国に到るに逮びて、始めて三十一字の詠あり。今の反歌の作なり」とあり、紀貫之の書いた仮名序では「あらかねの地にしては、すさのをの命よりぞおこりける。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、すなほにして、言の心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける」とあって、さらにその割注に「すさのをの命は、天照大神のこのかみなり。女と住みたまはむとて、出雲の国に宮造りしたまふ時に、その処に八色の雲の立つを見て、よみたまへるなり。や雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」とあります。また、鎌倉時代初期に編纂された『新古今和歌集』でも、和歌が須佐之男命から始まったと「真名序」にも「仮名序」にも書かれています。

このように見てくると、『古事記』においては、この世界や国土を維持していくミッションワークとして「修理固成」、すなわち、修め、つくり、固め、成せ、という行動が必要となりますが、それが、「まつり」と「うた」によって修理固成され、メンテナンスされ、整えられていくこととなります。とすれば、「まつり」とは自然と共同体の命の被膜を確認し強化するワークである。また、「うた」を歌うことは自然と共同体の命の被膜を整える「言向け和し」のワークである。さらには、そういう「まつり」と「うた」が基層文化としてある中で、御詠歌を歌いながら四国を歩くことは、いのちの被膜を整える「同行二人」のワークであるということになります。このようにして、自然と文化の交叉する日本的「世間」においては、自然と文化との被膜的關係が伝承され、根づいてきたといえます。

4. 詠歌から天台本覚思想までをつらぬく感覚と思想

ところが、現代のわたしたちが生きている時代においては「世間」は、ある日本的歪みやバイアスをもった、公共的なものに反する、内輪的な、他者性を媒介しない世界と

いう側面を強調されてきがちだと思うんです。私もそれはそれとして認めます。けれども、最初期の古典から見ると、「世間」を支えている根本基盤や構造としての国土と人間といういのちを被膜的なものにとらえる安全と安心の構造があるという点で、神道の立場から重要です。ここに「世間」の倫理が生まれてくるとするならば、「世間」の倫理を生み出す「いのちの倫理」というか、ある種、エコロジカルな倫理が根底にあると言えるでしょう。これが一つの表現として、「お天道さまが見ている」とか、「ご先祖さまが見ている」とかというような「見られ感」になり、これがネガティブにはたらくと「同調圧力」にもなっていきます。このあたりが日本において「世間」とか倫理の問題を考えていく時に重要だと思っております。

同時に「世間」の中にいのち的なもの、「いのちの「世間」」という言い方を敢えてしていますけど、息吹をもった自然の日本列島を形成していく力、産巢日（むすひ、産霊）の力と『古事記』はいうので、このむすひ的ないのちの息吹を重視したい。これが宗教人類学的には、アニミズムとか、生命主義といわれるのだと思いますし、契約的な世界観に対して、エナ（胞衣）的な世界観をつくっていると思います。

それを言葉の文脈で見えていくと、『日本書紀』の中に「草木悉によくもの言う」という表現になる。つまり、人間以前から言葉がある。神や人だけが言葉を話すのではなく、草木もみな言葉を発する。『日本書紀』に、葦原の中つ国は「磐根・木根立・草の片葉もよくもの言う」というような言葉があって、「岩も木も草も、みな言葉を発している」ということになる。自然・万物はさまざまなメッセージを放っている。これが、『古今和歌集』仮名序の「生きとし生けるものいずれか歌を詠まざりける」ともなり、さらには、こういう自然から発せられるメッセージを仏教的に全部包摂していく世界観が比叡山で、「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」という天台本覚思想になっていく。

天台本覚思想は真言密教や天台密教などの密教思想と法華思想の両方がミックスされていますが、そのプロセスで曼陀羅などに「神と仏の習合」が表現されていきます。その際に、マジカルな言語意識がより強化される。日本列島で生まれた言葉は、確かに中国の言葉や朝鮮半島の言葉とある程度似ている面も持ち、強い影響も受けてきているけれども、それとは違う地域特性をもってきた。それを、「言霊の幸わう国」とか「言霊の助くる国」という言い方をして、柿本人麻呂とか山上憶良らがこの国土を守るマジカルな被膜として「言葉」のスピリチュアルなはたらきを「言霊」と表現し、その「言霊」の一つの現れや形が「うた」となるという思想を表明した。

つまり、「言霊の幸わう国」というのは、具体的には、「うた」、主には短歌が詠まれる国でもあるということになります。そうした霊的なマジカルな「言葉」の力がはたら

き作用する国である。その「言葉の力」を日本の文化の一つの原型的なものとして採り上げたのが『古今和歌集』で、905年に醍醐天皇が紀貫之などに命じて編纂された。そこに、「春夏秋冬」の部立てが出来て、日本における季語の始まりとなった。季語は『古今和歌集』から始まったと私は思っていますが、季語の原型になる思想と感覚が生れた。もちろん『万葉集』にもその原型を遡ることはできます。けれども、春夏秋冬という季節の流れの中に人が住んで、さまざまな出逢いや別れや恋や痛みを経験することが『古今和歌集』の世界としてまとまっていくわけです。

そして、その冒頭に、「和歌（やまとうた）は、人の心を種として、万の言とぞなれりける。世の中にある人、事・業（こと・わざ）しげきものなれば、心に思ふ事を見るもの聞くものにつけて言ひだせるなり。花に鳴く鶯、水にすむかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地（あめつち）を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士（もののふ）の心もなぐさむるは歌なり」と、日本的な「うた」の哲学を歌い上げるわけです。

これは、もちろん、原理的・概念的には中国古典の『詩経』をもとにしています。「天地動かし、鬼神を感じる、人倫を動かし」ということに歌がいいというアイデアは、確かに『詩経』に基づいている。けれども、大きな違いは、『詩経』には「治世の音・乱世の音・亡国の音」があって、それを詩が反映しているという大きな国家統制的な詩観がありますが、『古今和歌集』では「花に鳴く鶯、水にすむかわづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」となる。これは『詩経』にはない。花の咲く木に寄って来て鳴くウグイスや水の中に住んでいるカエルの声を聞いていると、生きとし生けるもの、いのちあるものはみな歌を詠んでいるということが実感できるという、この部分がないのです。この「生きとし生けるものがみな歌を詠んでいる」という命題が先ほどいった「草木能言語」、つまり「草木みなことごとくよく言問う」という世界観に端を発しているところが根が深いのだということをいいたいわけです。

さらには、『延喜式祝詞』でも「こととひし、いはねきねたちさくのかきはをも、ことやめて」という章句が何度も定型的に繰り返し出てきます。また他には、「岩根・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる国なり」とか。あらゆる自然万物、森羅万象が言葉を発している。そういう言葉の発現状態は人が住むには荒々しすぎる強いエネルギーなので、その言葉をやめてもらって整えられたものにする。人間が聴こえるほどよき周波数に変える。

これは『常陸国風土記』の中にも「あらぶる神等、又、岩根・木立・草の片葉も辞語

ひて、昼は狭蠅なす、夜は火のふく国なり。此を事向けさむ大御神と、天降り供へまつりき」と記されている事態でもあります。言向け和す。言問うていたのを言向け和すことによって整えていく。要は、岩根も草木も言葉を発していた。そこで言葉を用いて、調律を図っていくのが言霊であり、和歌、詠歌、つまりは「うた」で、それが「まつり」の中でも歌われたり、あるいは祝詞になる。

5. 人間＝青人草の位置

さて、ここで視点と時代を変えます。

江戸時代に古典研究した平田篤胤は、『古道大元顕幽分属図』という図をつくっています。平田篤胤はここで取り上げてきた『古事記』『日本書紀』や『延喜式祝詞』などを研究して、世界の中心には天之御中主神がいて、それが二つの系統に分かれていくと考えた。一つは、天照大神から皇美麻命すなわち天皇につながる流れは、タカミムスヒから、イザナギの命を経て天照大神を経由することによって、スメミマすなわち天皇に至る。この流れが日本統治の表に出るラインとしてある。

一方、それに対する裏のライン、その表を支え補完するラインとして、カミムスヒから、イザナミの命を経て須佐之男命を経由することによって大国主命に至る系譜がある。表のタカミムスヒアマテラス系が太陽であれば、裏のカミムスヒスサノヲ系は月である。天照大神の方が「和御魂」である。須佐之男命は「荒御魂」で、さまざまな破壊をももたらす力である。しかし、その破壊は次なる創造（たとえば「国作り」）という「修理固成」を生む。この須佐之男命系が大国主命に伝わり、最終的に「幽世」（かくりよ）、すなわち幽冥界ないしあの世のことを司る神となる。その対となる「現世」（うつしよ）を治める天皇は、現実世界をガバナンスする。

こうして、平田篤胤は、古典解釈から、大国主命はあの世をガバナンスする神であると結論づけたのです。

ここで注目したいのは、それらを束ねるものとして「人草万物」と書いているところです。人草、青人草というのは、『古事記』の中に出てくる言葉でもあります。人間のことを意味します。人間はまた別の文脈で「大御宝」ともいわれますが、もう一つの古い言い方は「青人草」です。

つまり人間なのですが、草や虫と重なりあっている、そういう考え方や生命観が、神道における場所やいのちというものの考え方の根幹にある。古語において人間は「青人草」であり、後には「裸虫」とも言われるようになる。近世以降、「裸虫」(ラチュウ)という言い方が広がります。

村井弦斎の著書『近江聖人』は、明治にベストセラーになった、儒者中江藤樹のことを書いた伝記小説ですが、その中に雲助問答のようなものがあるんですね。「人間はどういう存在か」ということについて、禪問答のようなやりとりを交す。たとえば、「神様と虫とは、何方が好い」と問うと、雲助は「それは神様が好いに、違ひ無い。爾う被仰れば、旦那様、誰でも、正直にして居れば、神様になりますか。だが少し困る事がある。私は酒が好きだから、酒を飲んで、不可ますまいな」と答える。次に、藤樹が「それは飲まない方が、宣いが、然し飲んで、悪い事さへ、仕なければ宣い。」という。

それがさらに展開して、神様と虫の論議をしているところで、雲助は「学問修行と聞て、興ある事に思ひ、

「ではほうぼうの、学者と仕合を仕



どのつまりは「虫」だといひます。すると、客の方は、「何だ虫とは」と怒る。雲助は、「アハハ、虫々。爾う無闇と威張る人は、屹度虫に違ひない。人間も矢っ張り、虫だそうです」とさらに自説を述べ立てる。結局、客も「爾うよ。天地の裸虫と云ふから、虫の様なものだ」とあいづちをうつ。雲助は、さらに突っ込みつつ茶化して、「様なものではない、米を食うから米喰虫だ」など、譯も無い事を語りながら、坂本の宿に着きにけり」という一節が『近江聖人』の中に載っています。つまり人は『古事記』の時代から「青人草」と考えられ、さらには、「人は虫だ」「裸虫」だと呼ばれるようになる。そういう考え方の中に「神道の潜在教義」の核になる存在感覚と存在論があるのではないかというのが私のとらえ方です。

神道は仏教のように本学思想のような明確な思想表現があるわけではありません。教義があるわけではありません。しかし潜在的なもののとらえ方、考え方、思考法があり、それが表現されている。なんと表現されているかということ、「場」として、「道」として、「美」として、「祭」として、「技」として、「詩」として、それらのものを総合するような大きな「生態智」(エコソフィア)として表現されている。それが神道文化であり、神道思想の潜在教義ではないかというのが私の神道論です。

その中でも一番重要なのが、「場」ですね。つまりそれは「鎮守の森」ともなり、トトロが住んでいるような樹や磐ということになります。それを大切にしている生活文化が「道」として伝えられ、その中に「美」もあり、「祭」やさまざまな「歌」が歌われ、山と里との間をつなぐ神々の社、森が生み出されてきて、現在に至るわけです。東日本大震災のあった時、その神社に駆け上って助かった人たちも少なからずいました。もちろん中には津波に呑み込まれた神社もありますが、ほとんどの神社は高台にあるので被害をまぬかれ、生き延びた。

そういう中で「うた」というものが、どういう意味合いをもつのか。ある意味では事例は豊富ともいえるし、無数にあるともいえます。短歌結社、俳句結社の数を数えたことはありませんが、何万という数でしょうね。私の教え子の一人も俳句結社を主宰しています。堀本裕樹さんといいますが、NHKの俳句の講師も務めています。彼は「蒼海」という俳句結社雑誌を出していますが、彼の俳句との出会いから俳句結社の主宰までの過程をずっと発端から見ていきますと、それは無理してつくっているのではない。できるようにしてできる、おのずからそういう俳句や俳句結社が現代でも生まれてくる。若い人たちもそこに入って切磋琢磨して、いろいろとたいへん面白いことをやっている。連歌・連句的な座や講や結のようなもの、ある種、現代のオンライン社会の中でも日本的SNSのような形のもを生み出すベースになっている。それは閉じられた結社の結、

結びつけるという、ある種、被膜をもつと同時に、それが強力に反転すると、排除の構造を生み出す。すると、そこはまた大きな被害、排他性を伴うと問題になっていくわけです。

でも、そうした排他性を超える思想は、すでに、「生きとし生けるものいずれか歌を詠まざりける」（古今和歌集』仮名序）の中にあります。すべて森羅万象が「うた」を歌い、短歌も俳句もうたっているという立場からすれば、人間的な差別を超えていくものの考え方は生まれ得るわけですね。それを「天台本学思想」は非常に明確に命題化したともいえます。それが、「草木国土悉皆成仏」です。

その「うた」が、被膜を強化する、整える、草木事問う声を変容させて歌の声にしていくことによって穏やかになっていく。「言向け和す」。「和す」（やわす）というのは、和らげ、鎮め、平らにしていく。冒頭で取り上げた「平」という詩は、溶けだしてなくなるという空虚な「平」ですが、これは「安らぐ」という「平」です。心を鎮める「心直しの技法」ともなっていく。そういう歌や俳句の共同体の形成が、日本的な「世間」を生み出す元となったと考えています。

短歌や俳句を考える時、「俳諧」という字の組み立てに注目したい。「俳」という字は、「人に非ず」と書く。「諧」は、「みな言う」と書く。組み合わせると、「人に非ず、みな言う」となる。それこそ、事問ひし、岩根・木立・草の片葉の世界なんですよ。なので、私は人間心情的な短歌より俳句の方がずっと古代日本的、古層日本的と思っています。人間の心が中心ではなく、モノの方が、あらゆるモノが歌うという有り様を俳句の方がより鮮明に写し出しているからです。しかも俳句は吟行する、土地をめぐることによって土地の声を聴き取り、土地の声を人を通して言葉にしていく。こういう文学形式を生み出したことに感嘆します。俳句はすごいと思って、松尾芭蕉を尊敬しています。「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え、思惟を離れよ」という芭蕉哲学。そういうモノの中に入って、その動き、神道でいう「産霊」（むすひ）の現れ出ることを感ずる時に句は生まれてくる。「草木虫魚の目、心、これを大事にしなさいよ」ということですね。「それを感じ取れるようなレンズや耳を磨きなさいよ」ということ。それが、「松のことは松に習え」というメッセージとなる。

こういうところに「生態智的な表現」があって「自然に対する深く、慎ましい、畏怖畏敬の念における暮らしの中に鋭敏な観察と経験によって練り上げられた自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵と技法があるのだ」と思っております。

芭蕉の弟子の服部土芳『三冊子』の中に、「利口」という言葉があります。それは、

いわゆる「賢い」という読み方や意味ではなく、「口きき」という読み方をする。「心なきものに心を付、物いはぬものに物いはせ、利口したる体也」。つまり物をいわないものの声。パソコン自体の機械の声を聴く、コピー機の声聴くみたないところまで行き着くということです。これを「利口」という。口をきく(利く-聴く)こと。それが「草木言語」という『日本書紀』でいう「草木言問う」というところから始まり、『古事記』や『延喜式祝詞』『風土記』の中にある「言問い」でもあり、それが仏教的な慈悲の思想と混じり合うところで「草木悉皆成仏」という「天台本学思想」をつくりあげていった。このように私は考え、そういう根源的な「産霊」(むすひ)の力に帰れと言いたい。そうした存在感覚と思想の核は、芭蕉の俳句や作句態度の中にも生きている。『古事記』の「むすひ」と「修理固成」の精神は生きている。、彼が『古事記』読んだかどうか分かりませんが、その心は生きていると思います。

おわりに～朝日歌壇のホームレス歌人

最後のエピソードとなります。

朝日歌壇に2008年から2009年にかけて掲載されたホームレス歌人が登場することによって朝日歌壇の中で歌いあう、結社ではないけれども、ホームレスケア歌壇という「世間」が生まれたんですね。これを知ったのは、今年2月に、上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻在学の横田孝治さんが「孤独孤立問題と和歌のスピリチャリティ」と題して提出した修士論文の最後の事例として挙げられていたからです。その主査を担当した私はこの事例を大変興味深く思いました。そこで、その横田さんの研究に基づきながら最後のエピソードを紹介していきます。

横田さんは、朝日新聞掲載の「朝日歌壇」に、2008年～2009年にわたって、短歌の投稿をした公田耕一さんと、彼を中心とした共同体形成の経時的变化を検討していきます。公田さんは、居住地表記に「ホームレス」と記載したところから、「ホームレス歌人」として著名となり、朝日歌壇だけでなく朝日新聞の社会面や他紙、テレビなどでも短歌が紹介されました。それを取り上げた先行研究には、三山隆著『ホームレス歌人のいた冬』(文藝春秋)、小山田隆明著『詩歌に救われた人々、詩歌療法入門』(風詠社)などがあります。

具体的にその短歌を見ていくと、「野毛山を下れば汗の吹き出してドン・キホーテへ涼みに入る」(ホームレス・公田耕一)が佐佐木幸綱選で載っています。もう一人の選者の高野公彦このこの短歌を選に入れました。それに反応して同じ日の歌壇に、「ドン・

キホーテ」という安売りショップに涼みに入ったという歌の隣に高野さんが選んだ歌「生きていれば詠める ペンあれば書けること教えてくれるホームレス公田氏」（飯塚市・甲斐みどり）を載せています。公田氏の生き方から励ましを感じる。それが歌の励ましあいになっている。まさに短歌によるケアです。横田さんは、「公田の作品は周囲に衝撃と癒しをもたらし、その影響を受けた人たちの返歌や反応は公田に“周囲の期待”と共同体(仲間)意識をもたらしたことは、他者からの公田氏への返歌で明らかである。／この共同体意識の中であって、公田は現実の自身の表現欲求と自己顕示欲、周囲の期待する役割を知ることによる規制、共同体の中の「自我」存在の儂さも感じたはずである」と解釈した。

2008年12月に公田耕一さんの最初の句が選ばれ、最終的に合計28首の短歌が選ばれていくのですが、9番目の選歌が「ホームレス歌人の記事を他人事のやうに読めども涙こぼしぬ」です。これはなかなかアンビバレンツな歌で、自分のことを、距離を置くようで置けないものとして見えています。自分はこんなふうにも人目に晒されているのか、だけでも人々が、とりわけ、まなざしてくれることに対して私の心は、すごくうれしく、ありがたく思うという気持ちが一方にある。しかし同時に、ホームレスとして、その日暮らしの生活をしている我が身の行く末とか、いろいろ複雑な思いも表現される。

そして2009年2月には朝日新聞東京版社会面に次の記事が載りました。

「朝日歌壇に「ホームレス・公田耕一」と名乗る歌人が現れた。昨年末以来ほぼ毎週入選を重ねている。経歴も年齢も不明だが、投稿数に比例して”気になる存在”度は高まるばかりだ。(中略)歌壇係には、ホームレス歌人を思う歌や、「短歌を抛り所に生きぬいて」などの励ましが寄せられているが、「ホームレス」では、これらの厚意を届けることができない。公田さん、なんとか連絡がとれませんか。あなたが手にすべき入選一首につきはがき10枚の”投稿謝礼”も宙に浮いているのです。」

公田さん、返事をくれないと、声を届けられない、伝えられない。何とか連絡がとれないか。入選1首につきはがき10枚あるので、200枚くらいにのぼる投稿謝礼も宙に浮いていると呼びかけても、返信がなかった。こうしてこの「ホームレス歌人」は「朝日歌壇」から消えていったのです。

最後に、まとめに一言。

阿部謹也さんは『「世間」とは何か』というたいへん話題を読んだ本の中で、

「死者だけではない。日本人は動物をも含めた周囲の生物、非生物と共に生きているのであって、針供養や時計供養まで行われるこの国の風俗を想起しなければならない。神判はこのような日本人の死生観の一端として長い間行われてきたのであって、それ自

体は今では行われなくなったとしても、その背後にある考え方は生き残っているのである。(中略) 動物や鳥などとの関係については、今では近代化の結果起請文失の条にみられるようなことはなくなっているが、この法の背景にあるのは自然界との調和という考え方である。ここで「自然界」という場合、現代人が考える自然界とはやや異なっている。ここでいう自然界とは、「世の中」や「世」だからである。「世の中」や「世」は原則として動物や鳥あるいは非生物をも包含する世界であった。したがってそれらの自然界の存在と調和していない者には何らかの問題があると判断された。その状態がケガレである。私達は中途半端な西欧化と近代化の結果重要な視点を見失っており、神判の背後にあるこうした考え方を理解できなくなっているのである」

と述べています。

「自然界との調和」という問題。この「自然界」とは「世の中」のことで、ここに動物とか鳥とか生物も包含されている。このあたりが、『古事記』『日本書紀』『延喜式祝詞』や神社の中で、物語的存在感覚として、潜在教義としての場所として、森として伝えられてきているわけです。

以上、神道の立場から、「世間」という分かりにくい何ものかが話題になる基層にどういうものの考え方やとらえ方があるのかということに注目して問題提起してみました。結論としては、<いのちの世間>の中に「人の世間」はあるということでした。人の世間はいのちの世間に包含されている、このへんの関係は死者をも含んでいるので、古くて、大きな深いものであるということです。

ご清聴、ありがとうございました。